

飛耳長目

通巻198号 令和2年5月1日発行

「開頭」第88号四・五月合併号
昭和三十年五月二十日発行
実践発表
本物の教師になりたいという願い

東井義雄

■因縁を念う

私が一番貧乏かと思っておりましたが、森先生のお洋服もなんだか中古のようなお話でしたし、加藤先生もなんだか大変貧乏なお話をなさっておりました。私も貧乏人の一人であります。したがって何も財産らしいものは持っておりません。けれども私が一生大切にしている宝物がございます。それは色々な方々から頂いたはがきや手紙などでございます。新聞の切り抜き帳を買って貼って付けております。なぜこんなことをしているかといえ、世界中には忙しい人ばかり住んでおいて、私のような者でも思い出してください。という事はこれは大した事なんです、こういうことを粗末にしてはもったいない、というような思いで大切にしているでございます。

昔から袖触れ会うも他生の縁と申しまして、道を歩いていてふとそれが触れあつただけでも、これは前世に深い因縁がなければできないと申しますのに。今日多数の先生方とお会いして、しかも私なんかの話を聞いていただけるといって、この因縁はとつても大したものには違いないと思うのでございます。

そういう一つの事の奥に潜んでいる因縁の深さというふうなものを私たちは、何か粗末にしている、そういうところから私たちの不幸がやってくるのではないかと気が持たがします。私にも3人の子供がありますが、一番大きいのは中学3年の娘でもうお母さんよりも背が高くなっておりますが、その一番大きい子が私が帰ると「お父ちゃん、お帰り」と言つて、私の首にぶら下がる。すると次の小学5年の男の子が「お父ちゃん、お帰り」と言つて、前から同じようにして下さる。す

ると3人目の子供は1年生ですが、ぶら下がるころがないので、四つんばいになって「ん、もう……」と言つて牛の泣き真似などしながら、私の股ぐりをいたします。私はこの時いつも思うのです。この3人の子供たちと何時かは別れなければならぬ日がやってくる。これは絶対間違いないことだ。しかも今日こうやって3人の子供たちと無事に親子揃って暮らすことができた。これは素晴らしいではないかというふうな気持ちがあるんです。そしてこの幸せが喜ばないで、他にどんな幸せがあるだろうか、というふうな気持ちがないたしてきます。私は、一人が生きていくことも、素晴らしいと思えますけれども、みんなが揃って生きるという事は本当に素晴らしいことなんだ、という気持ちが出て来るといっていいと思います。

■父母・親の恩

そういう時にいつも思い出しますのは、森永が募集した昭和27年の作文集「お母さん」です。そこに、横須賀の沢山小学校の浦島くんという1年生の男の子の文章で、題は「僕の胸の中に」です。

「お母さん、お母さん」僕がいくら呼んでも返事をしてくれないのです。あのやさしいお母さんは、もう僕のそばにはいないのです。なくなつてしまつたのです。きよねんの12月8日に、かまくらびょういんで長いびょうきでなくなつたのです。いま僕はたのしみにしてきた小学1年生になり、まいにちげんきに学校にかよつています。あたらしいようふく、ぼうし、ランドセル、くつで、りっぱな1年生をお母さんに見せたいとおもひます。僕はあかんぼうのときにお父さんをなくしたので、きょうだいもなくお母さんと2人きりでした。そのお母さんまでが、僕だけひとりおいてお父さんのいるおはかへいつてしまったのです。いまはおじさん、おばさんのうちにいます。まいにち学校にいくまえに、お母さんのいるぶつだんにむかつて、いつてまいります。するのでお母さんがすぐそばにいます。べんきよ

をよくして、おりこうになり、おとうさんお母さんによろんでもらえるような、よい子になります。がっこうで先生が、お父さんお母さんのほなしをするとき、僕はさびしくなつてたまりません。でも僕にもお母さんはあります。いつもむねのなかにいて、僕のことをみています。いまはいなくても、ぼくのだいすきなお母さんは、おとなりのみいぼうちゃんやよつちゃんのお母さんより、いちばんいちばん、よいお母さんだともいいます。お母さんぼくはりっぱなひとになりますから、いつまでもいつまでも僕のむねからどこへもいかずに、みていてください。

かわいそうに、お父さんもお母さんにも別れてしまった浦島君です。そんな可哀想な浦島くんですけれども、私はこの文を読むと浦島君は偉いな、浦島くんはいい子だと思わずにいられません。でも浦島君も学校で先生が、お母さんお父さんのお話をなさるようなとき、寂しくて仕方がないのです。こういう時、浦島君は思っています。「いや、僕の胸の中にお母さんはいるんだ。お隣のみのぼうちやんやよつちゃんのお母さんよりも、いちばん、一番いいお母さんが、僕の胸の中にいるんだ。お母さん僕は立派な人になりますから、いつまでもいつまでも僕の胸からどこでも行かずに見ていてください」と叫んでいるのです。

■出会いを育む

私たちは毎日、人と顔を会わしている。子供と顔を会わしている。互いに村の人とも会わせる。ところが出会うという事は、ただ顔を会わせるというだけではありません。本当に心と心とが出会わなければ、出逢ったことにならないと思いません。顔が出会っただけでは何にもありません。嬉しいとも思いません。心に出会って初めて、初めて嬉しくなってくる。私はこのことを思うと、出会うということをもっともつと、大事にしなければならぬと思います。私たちのちっぽけな村の様子を考えてみまして

も、表面では村の人達は仲良さそうに見えます。毎日顔をあわすれば「今日は」と、挨拶はしてはおりませんが、本当には出会うておりません。私のところは狭い谷間の村ですから、田は皆こんな風な（図面を描いて）段々畑になって、その段々の土手には、草がありますが、大体上の者が下の三分ほど刈る。上の者が7分ほど刈るということになっております。ところが、その草刈りですが、上の者が刈る時ときにはきつと、一握りほど余計に刈り込まないと気が済まない。すると下の人は、「わしが刈ろうと思つておつたのに、ちよつと忙しかつたので来ないうちにちゃんと借りやがつた」この次には刈られないように、刈らねばならんというので、もう二、三日置けば、牛に喰わせてもちようど良い加減だと思つて、今度は下側の者が早く行つて刈る。そして今度は二握り程余計に刈り込む。するとまた上の者が、「おのれ、やつたな」ということになつて、もう十日ほどすればいいかげんになる時分、土手全部を刈つてしまふ。これが村人の現実であります。

この頃は、どの家も脱穀するのに発動機を購入してはいますが、その発動機もみんな共同で買ったらいいものを、少しづつの経費で買えるのに、ひとりが買うと、「あれは内よりもお金が少ししかないのに、買った。内もあれに負けんように、もつと新式のを買おう」というように、いらんところに力こぶを入れて、結局無駄をやつていく。そういう、こういう村の現実というものを考えてみましても、お互いがお互いの人間関係、命と命との出会いというものを、本当に考えていないことがわかるのであります。北原白秋の詩に「バラの木にバラの花咲く、何事の不思議なけれど」というのがありますが、白秋は、バラの木にバラの花が咲きだしてくる平凡極まる事実の中に込められた、命の不可思議を驚いたのだと思つて、バラの木から真つ赤な、バラの花が咲きだして来る、その当たり前の、素晴らしさに驚いたのだと思つて

■本物の幸せ

私たちの教育という仕事も、当たり前の目で眺める時には、鼻垂らした子供相手の何の変哲もなさそうな仕事であります。しかし子供の命に出会うところに、私たちの本当の生きがいや、期待、喜びが生まれてくるのではないかと思います。一昨年でしたか、農繁休業のすんだ時、一人の子供が図面を描いてきました。見ると、黒猫が棒のような、尻尾をあげて小便をしているところを描いております。バックは赤いクレパスで塗りたくつています。下手くそな絵を描いたものだと感心しながら、裏を見ますとそこには綴り方が書いてあるのです。「お休みの時に、僕は牛飼いをしました。牛を連れて川原に行く時、牛がぼこんぼこんと走つて仕方がありません。僕はハアハア言いながら、ついて行きました。すると今度は止まつてしまいました。「ハチツ」と言つても、「シツ」と言つても、ちつとも行きません。そして棒のようなしっぽをあげて小便をしはじめました。その時小便に夕日が映つて、とても綺麗だったのです。僕は生まれてから、あんな美しい小便を見た事は初めてです」。

私はこれを読んで、もういつぱい黒猫の絵を見たのです。その時に、教師である幸せをしみじみと感じました。何の変哲もないところにも子供の命が隠れている。その子供の命に触れるところから、私たちの日本の幸せが生まれてくる。ところが、さつきも申しましたように、私たち自身が、出会うと言う事を、粗末にしている。村の人々も粗末にしている。毎日、忙しい忙しいと、一生懸命に、朝暗いうちから晩暗くなるまで働いていて、一向に幸せらしいものに出会っていない。その有様を見ましても、これは何とかしなければならぬというと思つてはいられません。

■ぐるぐる廻るばかり

一昨年冬休みの友の編集会議が、夏休みの最中にありまして神戸へ出かけました。和田山から播

